

研究ノート

楚漢戦争の展開過程とその帰結（上）

柴田 昇

The Historical Development and the Result of the Chu-Han War (Part1)

SHIBATA Noboru

1 はじめに

近年、秦末～漢初期の歴史的意味を問い直そうとする研究が活発化し、いくつかの注目すべき研究成果も公表されている。特に「劉邦集団」「郡国制」といった問題に新たな光が当てられ始めたことは、秦末漢初政治史研究が新たな段階に入ったことを示すものだろう¹。

筆者は最近数年のうちに、『史記』の性格とそれが描き出している秦末漢初期の政治的過程に関わるいくつかの論考を公表した。そしてその中で、『史記』が項羽と劉邦を対照的な存在として描こうとする傾向を有しており、そこに見出される歴史像が、漢王朝の成立とその長期的継続という結果から遡及的に構築された、ある種の強いバイアスのかかったものであることを述べた。また民衆運動史的視点から陳勝集団・項羽集団・劉邦集団の分析を行い、秦末期の支配体制が政治権力の入り込めない広大な空間とふとしたきっかけで反体制的行動をとり始める膨大な人々を抱えつつ成り立つ粗放な面を持つものであったこと、項羽政権は諸侯に対して覇者として君臨するような性格のものではなかったこと、劉邦集団の関中制圧もいくつかの突発的な政治的事象によって実現されたもので必然的な結果と見るべきではないこと等を論じた²。伝世文献史料が伝える秦末期～楚漢戦争期の歴史は、項羽と劉邦を主役化する基本的なモチーフに従って漢代以降に再構成されたものと考えなくてはならない。

本稿は、項羽と劉邦の覇権闘争過程という一般的イメージに距離を置いて楚漢戦争を叙述することを第一の課題とする。そしてしばしばなされる、項羽の天下統一はなぜ失敗したのか、なぜ劉邦集団が天下統一をなし得たのかという問題設定を、そもそも特別な軍事的卓越性を有していなかった劉邦集団程度の人々が天下統一の主体となり得るような政治的環境とはどのようなものだったのかという問いに読み替えることで、楚漢戦争期の歴史的展開過程に関する再検討を試みたい。なお本稿においては、項羽の封建による十八王の就国（漢元年四月）から漢高祖の即位（漢五年正月）までを「楚漢戦争期」と称する。

2 項羽封建の性格と楚漢戦争の前提

秦王朝を滅ぼした項羽は今後の方針を楚懷王に問い、それに対して懷王の返答は、戦前に公布された約の遵守を求めた。懷王の約とは、先に入関した者を王とするとの内容だったので、約の遵守を強調することは関中の王を最初に入関した劉邦に与えるべきとの含意を持つことになる。換言すればそれは、滅秦の第一の功績を項羽に帰すことを拒むものだったのである。

この時点までの項羽はあくまでも楚懷王配下の一将軍であって、滅秦が実現してもその位置づけ自体に変更はなかった。また、対秦戦争の過程で項羽は、楚の将軍宋義を殺害する、秦の将軍章邯を雍王に立てるといった独断的行動をとっていた。懷王が約の遵守を公言したことは、項羽にとっては自らの功績を低く見積もられたことになり、楚懷王旗下への帰還が何らかの危険をはらむ可能性すら示唆するものだったと思われる。ここに至って項羽は、懷王のもとへの帰還を避け独自の権力基盤を構築するという新たな課題に直面することになった。

漢元年正月、項羽は十八王の封建を行い、分封された諸侯は漢元年四月に自らの封国に移動した。この時のいわゆる十八王は、対秦戦争において項羽に何らかの形で貢献した人物十三人とこの時点で既に王を称していた五人である。この十八王の国に加えて項羽自身が支配する西楚と、義帝と尊称されることになった楚懷王直轄領の二つが置かれ、かつての秦帝国の領域は二十の王国に細分化された（表1）。

表 1

	王号	項羽本紀の関連記事	高祖本紀の関連記事
旧秦	雍王	項羽立章邯為雍王、王咸陽以西、都廢丘。	三分関中、立秦三将、章邯為雍王、都廢丘。
	塞王	長史欣者、故為櫟陽獄掾、嘗有德於項梁、……故立司馬欣為塞王、王咸陽以東至河、都櫟陽。	三分関中、立秦三将……司馬欣為塞王、都櫟陽。
	翟王	都尉董翳者、本勸章邯降楚。……立董翳為翟王、王上郡、都高奴。	三分関中、立秦三将……董翳為翟王、都高奴。
	漢王	故立沛公為漢王、王巴・蜀・漢中、都南鄭。	負約、更立沛公為漢王、王巴・蜀・漢中、都南鄭。
旧魏	西魏王	徙魏王豹為西魏王、王河東、都平陽。	
	殷王	趙將司馬印定河内、数有功、故立印為殷王、王河内、都朝歌。	趙將司馬印為殷王、都朝歌。
旧韓	韓王	韓王成因故都、都陽翟。	
	河南王	瑕丘申陽者、張耳嬖臣也。先下河南、迎楚河上、故立申陽河南王、都雒陽。	楚將瑕丘申陽為河南王、都洛陽。
旧趙	代王	徙趙王歇為代王。	趙王歇徙王代。
	常山王	趙相張耳素賢、又從入関、故立耳為常山王、王趙地、都襄国。	趙相張耳為常山王、都襄国。
旧燕	遼東王	徙燕王韓广为遼東王。	故燕王韓广徙王遼東。
	燕王	燕將臧荼從楚救趙、因從入関、故立荼為燕王、都薊。	燕將臧荼為燕王、都薊。
旧齊	膠東王	徙齊王田市為膠東王。	
	齊王	齊將田都從共救趙、因從入関、故立都為齊王、都臨菑。	
	濟北王	故秦所滅齊王建孫田安、項羽方渡河救趙、田安下濟北数城、引其兵降項羽、故立安為濟北王、都博陽。	

旧楚	九江王	当陽君黥布為楚將、常冠軍、故立布為九江王、都六。	当陽君黥布為九江王、都六。
	衡山王	鄱君呉芮率百越佐諸侯、又從入関、故立芮為衡山王、都郢。	番君呉芮為衡山王、都郢。
	臨江王	義帝柱国共敖將兵擊南郡、功多、因立敖為臨江王、都江陵。	懷王柱国共敖為臨江王、都江陵。
	西楚霸王	項羽自立為西楚霸王、王九郡、都彭城。	項羽自立為西楚霸王、王梁・楚地九郡、都彭城。
	義帝	項王出之國、使人徙義帝、曰、古之帝者地方千里、必居上游。乃使徙義帝長沙郴縣。	項羽出関、使人徙義帝。曰、古之帝者地方千里、必居上游。乃使徙義帝長沙郴縣。

このような体制の発動が可能となったのは、漢元年正月の時点で項羽のもとに旧六国連合軍とでもいうべき圧倒的な軍事力が集中していたからである。ともに滅秦を実現した將軍たちに王位を与えたのは、項羽が分封の実行を宣言し得た根拠がその時点での項羽の下への圧倒的な軍事力の集中にあり、項羽軍団を構成する諸將の同意を得ることが分封実行の不可欠の条件だったことを示す。また分封対象の中に劉邦が含まれ、そして劉邦が封建された場所が関中・巴蜀地域だったことは、しばしば指摘されているように項羽の分封が懷王の命によるものであるという建前を崩さない形で行われたことを意味している。項羽の対秦戦争に直接的には貢献しなかった既存の王たちの王位を維持したのも同様で、項羽は自らとともに滅秦を成し遂げた將軍たちへの論功行賞を行うと同時に、そのような行為が天下を私するものではないことを具体的行動として示そうとした³。

ただし、この時に成立した体制を、二十人の王が国境線で二十に分割された各自の国を中央集権的に統治しているものとイメージするべきではない。後述の如く二十国体制はほとんど機能する間もなく崩壊しており、そのなかには韓王成のように就国できなかつた王や遼東王広の如く就国を拒んだ王も存在する。このような状況下では、実質的な統治体制を構築する余裕などほとんどの国にはなかつたと見るべきである。また王たちとともに呉芮の將軍梅鋗が侯となったことが明記され、陳余に三県が封じられたように、項羽による封建時には王国よりも小さな単位での分封も行われた。さらに彭越集団や斉の田栄の如く、王に匹敵する勢力を維持するとみられる自立的武装集団の存在も確認できる。

従来の研究では、楚の実権を項羽が握っていたこと、楚懷王が傀儡的存在に過ぎないことを前提として、項羽の封建をある程度明確な国家構想の上に成し遂げられたものと見る傾向があった⁴。しかし項羽はクーデターによって一時的に軍事的指揮権を掌握した者に過ぎず、封建も自らの王としての自立を主目的とした場当たりの政策と見なくてはならない。項羽は、懷王政権からの自立を目論み、独自の支配領域の獲得を目指して封権に踏み切った。項羽に「国家構想」と呼びうるものがあつたとすれば、それは旧七国領域の細分化⁵とその中で相対的に強力な支配領域の確保にとどまると考えるべきだろう。

項羽政権とは、二十国体制下では相対的に有力な、しかし旧七国領域全体からすればごく限られた「西楚」という地域の支配権を有するのみの政権だった。そして項羽によって分封された王たちは、項羽自身も含めて広域的な実効の支配など成し遂げる余裕はなく、各国内部には王権が入り込むことのできない多くの空間が野放しになっていたのである⁶。

3 地域の動きと彭城の戦い直前の情勢

二十国並立の体制はごく短い期間で崩れてゆく。その直接的な原因は、項羽封建を可能とした根拠自体の消滅にあった。分封の実行による諸侯就国は、項羽のもとに結集していた六国連合軍が各地に分散することを意味した。その結果、項羽が直接指揮し得る軍団は対秦戦争期に比べて著しく縮小することになった。これが項羽によって王位を与えられた王たちが以後必ずしも項羽に従わなくなった直接的な理由である。

諸侯就国によって発生した現象はそれだけではない。項羽は戦国七国をさらに分割して中国全土を二十の国に細分化した。そのことは、軍事力の規模からみれば、各国が保有する軍事力の小規模化を意味する。二十国並立体制とは、従来の半分程度あるいはそれ以下に縮小された軍団が国々に分有される体制でもあった。換言すれば、この体制が発動することによって中国には、圧倒的軍事力を保有する勢力の不在状況が生まれ、そのことが各地での新たな紛争の発生に結びついていったのである⁷。

項羽の二十国並立体制は十全に機能する時期をほとんど持たないままに解体してゆく。本章では彭城の戦い直前までの情勢を地域ごとに確認しておこう。

3-1 齊

楚漢戦争最初期に封建体制崩壊の先鞭をつけたのが齊・田栄である。齊は齊・膠東・済北の三国に分割された⁸。これに対して、封建対象から外された田栄は、諸侯就国早々の漢元年五月には軍事行動を開始、齊王田都の就国を阻止し、田都は楚に逃れた⁹。田市は膠東に就国したが、田栄の追撃により六月には即墨で殺害された¹⁰。田栄は、六月には齊王を称し、八月には済北王田安を破り三齊統一を実現している¹¹。

そして田栄の軍事行動は齊以外の諸国における武装集団の動きと深くかかわっていた。『史記』の記事は、田栄がこの時期の国際情勢におけるキーパーソンだったことを明示する。趙に対しては、三齊統一以前から田栄は陳余に兵を送って趙での軍事行動を支援している¹²。また、項羽本紀には「栄と彭越將軍印、令反梁地」との記事が見え、魏豹彭越列伝には次の記事が見える。

項羽は入関し、諸侯を王とし、各国に帰還させたが、彭越の万余の集団は属するところがなかった。漢元年秋、齊王田栄が項羽と対立し、使者を送って彭越に將軍印を授け、済陰から下って楚を攻めさせた。楚は蕭公角に彭越を撃たせたが、彭越は大いに楚軍を破った。

項籍入関、王諸侯、還帰、彭越衆万余人母所屬。漢元年秋、齊王田栄畔項王、漢乃使人賜彭越將軍印、使下済陰以撃楚。楚命蕭公角將兵撃越、越大破楚軍¹³。

これによれば、項羽封建の際にも特に属するところなく自立的な立場を維持していた彭越軍が反楚的な軍事活動を開始したのは田栄の後押しによるものだったことになる。

田栄の三齊統一が実現すると、ようやく項羽は齊への軍事介入を開始する。

漢二年冬、項羽は遂に北進して城陽に至り、田栄は軍を率いてこれと会戦した。田栄は

敗れ、平原に敗走し、平原の民に殺害された。項羽は北進して斉の城郭家屋を焼き払い、田栄の降卒を穴埋めにして殺し、老弱婦女を虜囚とした。斉を従えて北海に至り、各地を残滅した。斉人は各地で結集してこれに反抗した。そして田栄の弟の田横は斉の亡卒数万人を集め、城陽で反攻を開始した。項羽はそのため斉にとどまったが、連戦しても田横を下すことはできなかった。

漢之二年冬、項羽遂北至城陽、田栄亦将兵会戦。田栄不勝、走至平原、平原民殺之。遂北焼夷齐城郭室屋、皆阬田栄降卒、係慮其老弱婦女。徇齐至北海、多所残滅。齐人相聚而叛之。於是田栄弟田横収齐亡卒得数万人、反城陽。項王因留、連戦未能下。(項羽本紀)

項羽は漢二年正月には田栄を破り¹⁴、田假を再び斉王に立てる¹⁵。しかし項羽は斉人に対して厳しく抑圧する方針を採ったため、斉人は各地で抵抗運動を起し紛争を頻発させる。そしてその中でも、田栄の弟の田横は斉兵数万を結集し反楚戦を展開した¹⁶。

この期間、項羽軍団は斉に対する軍事活動に忙殺されていたが、漢の彭城進出により、一旦対斉戦争を放棄し漢との直接抗争に力を注がざるを得なくなってゆく¹⁷。その結果、田横は斉の諸城邑を回復、田栄の子の田広を斉王に立てることになり¹⁸、以後数年にわたって斉の自立性が維持される。斉軍は彭城の戦いに直接参戦しなかったものと思われるが¹⁹、斉が彭城の戦いの時点で西楚と対立する立場にあったことは明らかである。

3-2 韓・魏

旧韓地域は楚漢戦争初期に重要な争点の一つになった。項羽は旧韓領域を韓・河南の二国に分割、従来の韓王成をそのまま韓王にし、「張耳の嬖臣」申陽を河南王とした。しかし項羽は漢元年四月の諸侯就国時にも韓王成のみは就国させず、彭城まで同行させた上で侯におとし、最終的には殺害するに至った²⁰。韓王成の殺害をきっかけに、張良は漢に身を寄せた。『史記』は、項羽が韓王成殺害後の漢元年八月に鄭昌を韓王に立てたのは²¹、漢の東方進出を警戒して旧韓地域を自らに近い勢力で固めることを目論んだものと評している²²。

この時期までの項羽の関心は三晋南部に集中していたようで、斉等それ以外の地域の紛争に対して本格的に介入した形跡がほとんど見出せないが、田栄の三斉統一を契機に項羽軍は対斉戦にその関心を移す。そしてそれと入れ替わるように関中を制圧した漢軍が旧韓地域への侵攻を開始する。

漢二年、韓大尉信は韓の十余城を攻略、平定した。漢王は河南に至り、韓大尉信は韓王昌を陽城に撃った。昌は漢に降り、漢王はそこで韓大尉信を韓王とし、韓王信²³は常に韓軍を率いて従った。

漢二年、韓信略定韓十余城。漢王至河南、韓信急撃韓王昌陽城。昌降、漢王迺立韓信為韓王、常将韓兵従。(韓信廬綰列伝)

漢元年八月には三秦地域の諸王を撃った漢は、漢元年末～二年初頭と思われる時期に韓大尉信を将軍として韓王昌を破り、韓大尉信は漢二年十一月には韓王となった²⁴。同年同月には河

南王申陽も漢に降っている²⁵。

旧魏も西魏と殷の二国に分割された。魏豹は陳勝政権期に魏王となった魏咎の弟で、項羽に従って入関した武将の一人である。項羽は封建時に魏豹を河東に移動させ、殷王司馬卬を封じた。しかし、

項羽は諸侯を封じた際に、梁の地を自らが領有することを望み、魏王豹を河東に徙し、平陽を都とさせ、西魏王とした。

項羽封諸侯、欲有梁地、乃徙魏王豹於河東、都平陽、為西魏王。（魏豹彭越列伝）とあるように、旧魏領域のうち梁とその周辺地域は項羽の直轄領とされたため、西魏・殷は旧魏領域全体からすればごく限られた地域に過ぎず、この地域では不安定な情勢が続いた²⁶。陳丞相世家には次のような記事がある。

項羽が東に移動し、彭城に王として立つと、漢王は漢中から戻って三秦を平定して東進し、殷王も楚に背いた。項羽は陳平を信武君として、魏王咎の客で楚に居た者たちを率いさせ、陳平は殷王を降伏させて帰還した。

項羽之東、王彭城之地、漢王還定三秦而東、殷王反楚。項羽乃以平為信武君、將魏王咎客在楚者以往、擊降殷王而還。

漢の三秦平定と前後する時期に殷王司馬卬は楚に叛いている。この動きが漢と呼応したものかどうかははっきりしない。殷王司馬卬は項羽に派遣された陳平によって帰順させられているが、この殷王を漢は漢二年三月に撃ち、翌月には河内郡を置いた²⁷。この時陳平は項羽の怒りを恐れて楚軍から逃れ漢に降ったという²⁸。陳平は、自らが帰順させた殷が容易に漢に降ったことに対する項羽による責任追及を恐れたものと思われる。さらに同じく漢二年三月には魏王豹も漢に降っている²⁹。

斉・田栄より將軍印を与えられていた彭越集団が漢との関係を強め始めたのは、旧魏の二王が漢に降ってきたこの時期以降のことと見られる。漢が東方の楚域に接する地域に進出した頃のことを、魏豹彭越列伝は次のように記している。

漢王の二年春、魏王豹や諸侯とともに漢は東に進み楚を攻めた。彭越も三万余の兵を率いて外黄で漢軍に合流した。漢王は言った。「彭將軍は魏地の十余城を得、早く魏の後を立てることを望んでいる。西魏王豹は魏王咎の従弟であり、まさに魏の子孫である」。そして彭越を拜して魏の相国とし、魏兵を率いて梁地を攻略することを許した。

漢王二年春、与魏王豹及諸侯東擊楚、彭越將其兵三万余人歸漢於外黄。漢王曰「彭將軍收魏地得十余城、欲急立魏後。今西魏王豹亦魏王咎從弟也、真魏後」。乃拜彭越為魏相国、擅將其兵、略定梁地。

これによれば、漢王の意見によって魏豹は魏王位に就き、彭越も魏の相国となった。漢の影響力は漢二年三月の段階で三晋地域南部全域に及び、四月には韓・魏の軍は漢王とともに彭城に進出することになった。

3-3 趙・燕

それでは三晋地域北部の動向はどうなっていただろうか。趙は常山・代の二国に分割された。張耳陳余列伝には次のように記される。

張耳が就国すると、陳余はますます怒り、「張耳と私の功績は同等である。いま張耳は王となり、私のみが侯であるのは、項羽の不公平によるものだ」といった。斉王田栄が楚に反旗を翻すと、陳余は夏説を使者として田栄に送り、このように伝えさせた。「項羽は天下を主宰するに不公平で、王とした諸將を尽く善地に封じ、もともとの王たちは悪地に移し、そのため趙王はいま代におります。どうか私に兵を与え、南皮を藩屏としてください」。田栄は自らの仲間を趙において楚に対抗させようとし、兵を陳余に与えた。陳余は三県の兵を動員して常山王張耳を襲撃した。

張耳之國、陳余愈益怒、曰「張耳与余功等也。今張耳王、余独侯、此項羽不平」。及齊王田栄畔楚、陳余乃使夏説説田栄曰「項羽為天下宰不平、尽王諸將善地、徙故王王惡地、今趙王乃居代。願王假臣兵、請以南皮為扞蔽」。田栄欲樹党於趙以反楚、乃遣兵從陳余。陳余因悉三県兵襲常山王張耳。

張耳は項羽に従って入關し、その功績によって旧趙領域を二分した内の常山王に封ぜられていた。これに不満を抱いた陳余は斉王の田栄に支援を依頼し、兵を借り受けて張耳を破り、張耳は漢を頼った³⁰。

陳余は張耳を破ると、趙地を全て回復し、趙王を代より迎えて、再び趙王とした。趙王は陳余を徳ありとし、代王に立てた。陳余は趙王が弱く国が平定されたばかりだったので就国せず、趙にとどまって趙王を補佐し、夏説を相国として代を守らせた。

陳余已敗張耳、皆復收趙地、迎趙王於代、復為趙王。趙王徳陳余、立以為代王。陳余為趙王弱、国初定、不之國、留傳趙王、而使夏説以相国守代。(張耳陳余列伝)

陳余は項羽によって代王とされていた趙王歇を再び趙王に迎え、それに対して趙王歇は陳余を代王に封じた³¹。しかし陳余自身は代に行かず、趙に残って王を補佐したという。この記事は趙・代二国においては陳余の圧倒的な影響力のもとでほぼ一体の統治体制が施行されたことを伝えるものだろう。旧趙地域においては漢元年末～二年初頭段階には項羽・西楚の影響力を排した独自の体制構築が開始されており、趙・代は彭城の戦いに漢に与する立場で参戦することになる³²。少なくとも十八王封建体制施行から半年程度の間旧趙地域に対する項羽の影響力は完全に排除されており、彭城の戦いの際には漢の要請にこたえて出兵している。

なお、さらに北の旧燕領域は燕・遼東の二国に分割されていたが、旧燕王韓広は遼東への移動を拒否した。

燕將臧荼は燕王となり、薊を都とされた。もとの燕王韓広は移されて遼東王とされた。しかし韓広は従わず、臧荼は韓広を無終で攻め殺した。

燕將臧荼為燕王、都薊。故燕王韓広徙王遼東。広不聽、臧荼攻殺之無終(高祖本紀)。臧荼は韓広を攻撃し、漢元年九月には臧荼による燕統一が実現している³³。そもそも項羽の

方針は旧燕地域では一時的にすら貫徹していない。詳細は不明ながら、北方旧燕地域に対する項羽の影響力も遅くとも漢元年末には失われていると考えてよい。

3-4 旧秦

旧秦地域は雍・塞・翟・漢の四王に分割された。漢元年四月の就国時、劉邦は張良の策に従って棧道を焼き、東方進出の野心を持っていないことを項羽に示したという³⁴。しかし漢は就国後しばらくして他の旧秦三国への侵攻を開始する。高祖本紀には次の記事が見える。

八月、漢王は韓信の計を用いて、故道から三秦に戻り、雍王章邯を襲撃した。章邯は漢軍を陳倉で迎撃したが、雍軍は敗れ、敗走した。雍軍は好時にとどまって戦ったが、再び敗れ、廢丘に敗走した。漢王は遂に雍の地を平定した。そして東進して咸陽に至り、兵を分けて雍王を廢丘で包囲し、さらに諸将を遣わして隴西・北地・上郡を攻略・平定した。また將軍薛欧・王吸に命じて武関を出させて、南陽の王陵軍の援助を受けつつ、太公・呂后を沛から迎えさせた。

八月、漢王用韓信之計、從故道還、襲雍王章邯。邯迎擊漢陳倉、雍兵敗、還走。止戰好時、又復敗、走廢丘。漢王遂定雍地。東至咸陽、引兵圍雍王廢丘、而遣諸將略定隴西・北地・上郡。令將軍薛欧・王吸出武関、因王陵兵南陽、以迎太公・呂后於沛。

また秦楚之際月表では、

邯守廢丘、漢圍之。(秦楚之際月表・漢元年八月・雍)

欣降漢、国除。(秦楚之際月表・漢元年八月・塞)

翳降漢、国除。(秦楚之際月表・漢元年八月・翟)

とされており、これらによれば、漢元年八月には旧秦地域の大方は漢の勢力圏に入っている³⁵。また漢軍の一部の部隊はすでに関中の外部に進出している。

二年に入ると漢王自身が旧秦領域を出て東方に進出を開始する。既に旧秦地域は、雍王章邯の抵抗が続いているものの、ほとんどが漢によって制圧されていた。その時期の動向を高祖本紀は次のように記す。

二年、漢王は東方進出して各地を攻略し、塞王欣・翟王翳・河南王申陽は皆降った。韓王昌は従わなかったので、韓太尉信をしてこれを撃破させた。そして隴西・北地・上郡・渭南・河上・中地郡を置いた。関外には河南郡を置いた。韓太尉信をあらためて立て韓王とした。諸将の万人を率いてあるいは一郡を率いて降る者は、万户に封じた。

二年、漢王東略地、塞王欣・翟王翳・河南王申陽皆降。韓王昌不聽、使韓信撃破之。於是置隴西・北地・上郡・渭南・河上・中地郡。関外置河南郡。更立韓太尉信為韓王。諸将以万人若以一郡降者、封万户。

漢はごく短い期間で旧韓領域を制圧する。すでに引いた秦楚之際月表によれば、二年十一月には河南が漢の郡となり、同月には漢の後押しで韓王信が立った。二年三月には西魏・殷が降り、旧魏領域も漢によって制圧され、魏王豹が立つことになった³⁶。そして二年四月には漢は

「五諸侯」連合軍として彭城に入っている。

上述の如く、漢は封建初期から東方進出を明確な課題として三秦・三晋南部地域への侵攻を展開している。『史記』に立伝される漢の功臣たちはほとんどが「還定三秦」に参加した者どもであり、この時関中全域を制圧し支配下においたことが以後の漢王権にとって画期となる事業と意味付けられたことを示唆する。雍王の抵抗が完全に終息する前に旧韓進出を開始したことは、東方進出が当時の漢にとって最優先の課題と位置づけられていたことを意味するだろう。

なお劉邦が義帝のかたき討ちを自らの正当性の証としたことはしばしば指摘されるが、漢の三秦侵攻自体は義帝殺害以前に始まっている。高祖本紀には漢二年三月に漢王は義帝の死を知ったとの記事があり、これに従うならば三晋侵攻開始時でもその情報は劉邦に届いていないことになる。漢の三秦・三晋地域侵攻は義帝殺害とは本来全く無関係に開始されたものと見なくてはならない。

3-5 楚の諸王 (1)

項羽の封建において戦国楚の領域は以下の五王の国に再編された。

黥布：九江王（都六）

鄱君呉芮：衡山王（都邾）

義帝柱国共敖：臨江王（都江陵）

項羽：西楚霸王（都彭城）

楚懷王：義帝（都江南郴）

この中で臨江王共敖は、義帝殺害に関与したことを除いてこの時期に目立った記録が見出せない。臨江王共敖に関しては項羽陣営に属したと考えられる場合が多いが³⁷、決め手はない。共敖支配域を項羽の勢力圏と見るには楚漢戦争期における臨江王共敖の存在感は非常に希薄で、また項羽陣営の一部として戦闘に参加した形跡が見出し難いのは解せない。本稿では、臨江王共敖は項羽政権のシンパでありつつ基本的には中立的・自立的な立場をとり続けており楚漢戦争の動向に直接的には関係しなかったと考えておきたい。

また衡山王呉芮に関しても義帝殺害に関与したことを除いて楚漢戦争期には目立った動きが記録されていない。呉芮は九江王黥布の義理の父にあたるが、項羽と黥布の間で戦闘が始まったとしてもそこに呉芮が参戦した記録は見出すことができない。漢王朝成立後も呉芮の王位は維持されており、呉芮が積極的に項羽に協力していたとは考えにくい。しかし呉芮が漢側に立って西楚と戦ったことを示す記録は皆無である。『漢書』高帝紀によれば項羽との間に何らかの戦闘があり支配領域が侵されたこともあったようだが³⁸、詳細は明らかにし難い。また呉芮の将である梅鋗は対秦戦争期から劉邦と行動を共にしていた。そしてそのことが漢初期における呉芮の王位維持につながっていることを想起するならば³⁹、呉芮はこの時期には、項羽とある程度の距離をとりつつ中立的な立場を保ち続けていたことが推測されよう⁴⁰。

旧楚域の王の中で反項羽的と解し得る動きが記録されているのは九江王黥布である。黥布は

対秦戦争期以来項羽と行動を共にしてきた盟友的存在で、項羽の意志による義帝殺害の実行者とする記事もある。しかし、田栄による三斉統一に対して対斉戦争開始のために項羽が黥布に出兵を請うた際、黥布は病と称して参戦を拒み兵数千人を派遣したにとどまったという⁴¹。このとき黥布が出兵を拒んだこと、またこの時の項羽が黥布以外に出兵を命じた記事が見出せないことは、項羽政権が周辺の諸国に対してそもそも強固な規制力を有しておらず、ましてや軍事動員を一方的に強要できるような存在ではなかったことを示唆する⁴²。項羽にとっては、黥布くらいしか動員し得る可能性のある対象がおらず、しかもその黥布にも距離を置かれたのである⁴³。そして彭城の戦いの後、項羽と黥布は敵対関係となり、項羽配下の龍且に敗れた黥布は漢に身を寄せることになる。

3-6 楚の諸王（2）

注目されることは少ないが、項羽は楚域の南方に義帝直轄領を設定しているようである。そして項羽は、義帝を長沙の郴県に移し、さらに楚域の王たちに命じて義帝を殺害させたというのである⁴⁴。

義帝殺害の実行者に関しては、項羽本紀・高祖本紀では「衡山王・臨江王」を挙げ、黥布列伝では「九江王布等」に命じられたこととする。このように明記されている以上、楚域の三王は何らかの形で義帝殺害に関与しているとみるべきだろう。詳細は不明だが、本稿においては衡山王・臨江王ら楚域の王たちが義帝殺害に動員され、最終的に追撃・殺害を実行した軍が九江王黥布の配下だったものと解しておきたい。

具体的時期については秦楚之際月表漢二年十月の項に「項羽滅義帝」とある。この時期までには田栄による三斉の統一、漢による三秦制圧、臧荼による旧燕統一がほとんど実現しており、項羽の封建体制は原型をとどめていない。義帝殺害は諸王による反項羽的軍事活動が発生した原因となった事件ではなく、既に発生していた深刻な政治的混乱の中での出来事と見るべきである。

それではどのような政治的混乱が義帝殺害に結び付いたのか。これに関して筆者は、義帝配下集団による項羽政権に対する抵抗戦が展開された可能性を想定したい。高祖本紀に「群臣稍倍叛之」、項羽本紀に「其群臣稍稍背叛之」とある記事は、通常「義帝を見限って臣下たちが背き離れていった」意に解される⁴⁵。しかし多くの臣下に見放され僻地に遷される無力な旧主を、楚域の王を動員してまで殺害する必要が項羽にあっただろうか。この記事は、長沙に遷されることになった義帝直属の勢力の中に西楚の意向に反する反項羽的な動きを示す者たちがあらわれたことを記しているのではないか。そしてそのような抵抗運動を抑圧するために楚域の王たちは項羽に協力して軍事動員に応じたものと考えられる。

このような推測が成り立つとすれば、義帝を支持する楚人グループが存在し、その動きに対応するために複数の国から軍が動員されていることになり、義帝及び義帝政権直属グループが項羽の思うままにされ続けるしかないような無力な存在ではなかった可能性が出てくる。これらの一連の記事は、義帝＝懐王政権直属グループがある程度の軍勢力を保有していたこと、そしてそれ

が楚域南部を拠点として項羽直轄軍の縮小に乗じた抵抗戦を開始しようとしていたことを示唆するものなのではないだろうか。そうだとすれば、項羽は楚域諸王の軍を動員しての義帝殺害という強引な手段によらなければ義帝政権直属グループの抵抗運動を抑止できなかったことになる⁴⁶。旧楚域内部でもまた、楚漢戦争初期から紛争が続いていたと考えられるのである。

ここまで見てきたように楚漢戦争期の楚域諸国は項羽の下で一枚岩に結集していたとは考え難い。滅秦後、懐王政権からの自立を目論んだ項羽は、封建制施行を強行することで懐王政権を直轄領内に封じ込め、項羽政権としての自立性を確保しようとした。項羽の西楚は九郡を支配領域とする、二十国中においては相対的に最有力の国だった。しかし封建実行後数か月のうちに諸国領域は再編成され、また楚域諸国に対する項羽政権の規制力も限定的なものにとどまっていた。換言すれば、項羽政権は封建当初より一貫してかなり孤立性の高い勢力として存在したのである。

十八王封建体制施行後の西楚は、まず韓王成を殺害し韓王昌を置いた。続いて田栄による三齊統一に対して斉に出兵し、田栄を破った。この時項羽は九江王黥布に出兵を要請したが、黥布は病と称して少数の兵を出すにとどまったことは前述の通りである。田栄を破った項羽は、斉の城郭を焼き、兵士を穴埋めにし、老弱婦女を虜囚としたという。このような動きは斉の動向が楚域の有力者にとって一貫して大きな影響を及ぼし続けてきたことの反映だろう。項羽にとって斉は叩けるときに徹底的に叩いておくべき存在と考えられた。しかしその結果、齊人は田栄の弟である田横のもとに結集し、西楚軍に対する抵抗戦を繰り広げてゆく。漢二年四月、漢が彭城に入ると項羽は斉攻略を断念し、彭城に兵を返し、漢を中心とする五諸侯連合軍に対峙することになる。

3-7 小結—楚漢戦争初期における諸国の特質

本章で検討してきた楚漢戦争初期の諸国の特質を本稿で必要な限りにおいてここで整理しておこう。項羽の構想した封建体制が実際に十全に施行された期間はほとんどない。諸侯就国早々に斉の三王が滅ぼされ、遼東王広の如くそもそも就国を拒否した王も存在することを踏まえれば、項羽の封建体制が十全な形で実現した時期は全くなかったと言ってもよいかもしれない。そして諸王就国から半年後にはこの体制は全く原型をとどめない状態になっている。このような実質的に機能した期間がほとんどない体制を、秦の全土郡県化政策や漢のいわゆる「郡国制」と並ぶ「支配体制」と見るのは、過大評価と言わざるを得ない。項羽の封建とは、軍事力の集中を根拠とする諸国細分化の強行によって自らの支配領域を確保することを主目的とした、場当たり的な策以上のものではないと考えるべきだろう。

封建体制解体の動きは、基本的には戦国諸国の回復運動として展開した。項羽により細分化された国々の多くがごく短い期間に再統一を目指して動き始め、それは斉・燕・秦（漢）で実現する。旧趙領域は代・趙の二国が継続するが、この地域では陳余によって二国がほぼ一体となった領域経営が行われたようである。韓・魏に関しても戦国期の領域とは必ずしも一致しな

いが、韓王・魏王が擁立されている。

楚域以外に位置するこれらの国々の中で、漢の見せる侵略的傾向は際立っている。他の国々は細分化された自国領域の再統合と王位の回復を主課題としているようで、主体的に領域外に打って出る動きをあまり見せない。軍事行動も他の有力勢力の呼びかけに応じて動く、もしくは他地域への支援・援兵を行うのが通例で、他国への侵攻・征服戦争を目的としたとみられる大規模な軍事行動は見出し難い。

これに対して漢は、遅くとも漢元年八月以降一貫して他国侵攻を続けており、旧秦領域制圧後の軍事行動は三晋地域にも及んでいる。漢二年初頭には雍王章邯の抵抗拠点を残したままの状態に漢王自身が韓攻略に乗り出していることは、漢にとっての東方進出の重要性を物語る。いわば漢は、他国侵攻・東方進出を明確な課題とし続けた唯一の政権なのである。

なぜ漢のみがこのような動きを見せ続けるのか、ここでただちに明確な解釈を下すことはできないが、漢が十八王の中で本来の出身地から遠く離れたほぼ無関係な場所に封じられた唯一の勢力だったこと⁴⁷がこれと無関係とは考えにくい。現時点では、この時期の漢の軍事行動とは本来的には郷里回帰の運動だったと考えておきたい⁴⁸。

以上みてきた六国の領域と大きく異なった傾向を見せるのが、旧楚領域である。この時期の旧楚領域には、二つの地域的特質を見出すことができる。

第一に、楚域では国々が楚の再統一を目指して動くことはなかった。南方楚は春秋時代の呉・越領域をも含む、民族的・文化的多様性を有する広大な空間で、広域的な中央集権の統一権力が成立しにくかった。項羽が封建時に楚を五分割したのはそのような地域的特性に対する一つの対応形態である。

第二に、上記の分権的性格に対応するように、秦末期の楚は特に多くの有力な武装勢力が林立している地帯だった。秦末期の旧楚領域及び齊・楚・魏交界地域は、自立的武装集団の出現が最も多く記録され、ごく短い期間に多くの集団が激突と統合を繰り返した空間である⁴⁹。武装集団の林立は楚域諸集団における戦闘体験の蓄積を可能とした。楚域出自の武装勢力が持つ軍事的能力の背景には、これらの武装集団による膨大な戦闘体験の蓄積が存在したものと思われる。

項羽軍団をはじめとする楚域及びその隣接地域の軍団がしばしば示す軍事的能力と、それと裏腹な項羽政権の政治的孤立性の背景には、以上のような楚の地域的特性が想定される。そして漢二年四月の彭城の戦いは、数的に圧倒的に勝る五諸侯連合軍に対して、少数かつほぼ単独の項羽直屬軍団が圧倒的な軍事的能力を発揮する戦いとなったのである。

註

-
- 1 楚漢戦争期に関する近年の代表的な研究成果のうち本稿と関連するものとして、李開元『漢帝国の成立と劉邦集団』（汲古書院、2000）、楯身智志『漢代二十等爵制の研究』（早稲田大学出版部、2014）、太田麻衣子「越の淮北進出とその滅亡—「劉邦集団＝楚人」説の再検討のために—」（『古代文化』64—Ⅲ、

- 2012)、松島隆真「漢王朝の成立一爵を手がかりに」(『東洋史研究』69-1、2010)、「陳渉から劉邦へ一秦末楚漢の国際秩序一」(『史林』97-2、2014)等をあげておく。また概説書として、堀敏一『漢の劉邦 ものがたり漢帝国成立史』(研文出版、2004)、藤田勝久『項羽と劉邦の時代』(講談社選書メチエ、2006)、佐竹靖彦『劉邦』(中央公論新社、2005)、『項羽』(中央公論新社、2010)がある。なお秦末漢初政治史に関する研究動向については、松島隆真「『劉邦集団』と『郡国制』をめぐる問題—漢初政治史復元のために—」(『中国史学』23、2013)。
- 2 柴田昇「陳勝論ノート—陳勝呉広の乱をめぐる集団・地域・史料—」(『名古屋大学東洋史研究報告』35、2011)、「秦末の抵抗運動」(吉尾寛編著『民衆反乱と中華世界—新しい中国史像の構築に向けて—』汲古書院、2012)、「『史記』項羽本紀考」(『愛知江南短期大学紀要』42、2013)、「項羽政権の成立」(『人文論集』63-2、静岡大学人文社会科学部、2013)、「劉邦集団の成長過程」(『海南史学』51、2013)。
 - 3 項羽の戦後処理と封建の実行に関しては、柴田昇「劉邦集団の成長過程」10～13頁でも論じた。また筆者は別稿で、項羽の直面していた課題に対して戦国七国の細分化という具体的な方法論を与えたのは、項羽の生まれ育った旧楚域の分権的環境だったことを推定した。柴田昇「項羽政権の成立」94～95頁。
 - 4 たとえば李開元は「項羽は王政復古の原則を否定し、旧六国の王権世襲の正当性を認めなかったのである。彼は陳勝によって創始された、功により王と称する原則を引き継ぐ一方で、六国を復活させるという徳の点を捨て去った。言い換えれば、項羽が王に封じる原則はただ軍功にあったのである。……項羽の封王の理念は、血縁世襲の貴族王政の原則を否定し、平民王政の軍功原則を取り入れたことである」とし、項羽の開始した王政を「軍功王政」と呼んでいる(『漢帝国の成立と劉邦集団』97～98頁)。なお項羽の封建においては旧六国王も王位を保持しており、李の言う「軍功」王制のみからこの時期の動向を理解することはできない。
 - 5 松島隆真は、項羽の領域構想を戦国中期以前の地理的状況への回帰とする。松島隆真「陳渉から劉邦へ一秦末楚漢の国際秩序一」24頁。
 - 6 このような状況は秦末期からの継続性を持つものである。柴田昇「秦末の抵抗運動」では「秦末期の中国には、王朝権力の管理能力が貫徹していない広大な空間が広がり、また王朝支配の枠組みから逸脱した、ふとしたきっかけで抵抗勢力へと転化するような人々が、都市的集落にも、一般庶民の生活空間から離れた山沢にも、大量に存在していた」(203頁)ことを指摘した。
 - 7 柴田昇「項羽政権の成立」95頁、「劉邦集団の成長過程」13～14頁。
 - 8 項羽……滅秦而立侯王、乃徙齊王田市更王膠東、治即墨。齊將田都從共救趙、因入閩、故立都為齊王、治臨淄。故齊王建孫田安、項羽方渡河救趙、田安下濟北數城、引兵降項羽、項羽立田安為濟北王、治博陽。田榮以負項梁不肯出兵助楚・趙攻秦、故不得王。(田儻列伝)
 - 9 田榮擊都。都降楚。(秦楚之際月表・漢元年五月・齊)
 - 10 田榮擊殺市。(秦楚之際月表・漢元年六月・膠東)
屬齊。(漢元年七月・膠東)
田榮聞項羽徙齊王市膠東、而立齊將田都為齊王、乃大怒、不肯遣齊王之膠東、因以齊反、迎擊田都。田都走楚。齊王市畏項王、乃亡之膠東就國。田榮怒、追擊殺之即墨。(項羽本紀)

- 11 齊王田栄始、故齊相。(秦楚之際月表・漢元年六月・齊)
田栄擊殺安。(秦楚之際月表・漢元年七月・濟北)
属齊。(漢元年八月・濟北)。
栄因自立為齊王、而西擊殺濟北王田安、并王三齊。(項羽本紀)
栄亦發兵以距擊田都、田都亡走楚。田栄留齊王市、無令之膠東。市之左右曰「項王強暴、而王当之膠東、不就国、必危」。市懼、乃亡就国。田栄怒、追擊殺齊王市於即墨、還攻殺濟北王安。於是田栄乃自立為齊王、尽並三齊之地。(田儻列伝)
- 12 趙將陳余亦失職、不得王。二人(田栄・陳余)俱怨項王。項王既歸、諸侯各就国、田栄使人將兵助陳余、令反趙地。(田儻列伝)
- 13 彭越列伝の原文では漢が將軍印賜与に關与したかのように記すが、本稿では『史記会註考証』所引の劉放説に従い、「漢乃使人賜彭越將軍印」の「漢」字は省いて解釈する。
- 14 項籍擊栄、走平原、平原民殺之。(秦楚之際月表・漢二年正月・齊)
- 15 項籍立故齊王田假為齊王。(秦楚之際月表・漢二年二月・齊)
- 16 田栄弟横反城陽、擊假、走楚、楚殺假。(秦楚之際月表・漢二年三月・齊)
項王遂燒夷齊城郭、所過者尽屠之。齊人相聚畔之。栄弟横、收齊散兵、得数万人、反擊項羽於城陽。(田儻列伝)
- 17 漢王率諸侯敗楚、入彭城。項羽聞之、乃醜齊而歸、擊漢於彭城、因連与漢戰、相距滎陽。(田儻列伝)
- 18 齊王田広始。広、栄子、横立之。(秦楚之際月表・漢二年四月・齊)
以故田横復得收齊城邑、立田栄子広為齊王、而横相之、專国政、政無鉅細皆斷於相。(田儻列伝)
- 19 辛德勇「楚漢彭城之戰地理考述」(『歴史的空間与空間的歴史』北京師範大学出版社、2013) 116 頁。
- 20 韓王成無軍功、項王不使之国、与俱至彭城、廢以為侯、已又殺之。(項羽本紀)
項羽誅成。(秦楚之際月表・漢元年七月・韓)
- 21 韓王鄭昌始、項羽立之。(秦楚之際月表・漢元年八月・韓)
- 22 令故呉令鄭昌為韓王、距漢兵。(高祖本紀)
項籍之封諸王皆就国、韓王成以不從無功、不遣就国、更以為列侯。及聞漢遣韓信略韓地、迺令故項籍游呉時呉令鄭昌為韓王以距漢。(韓信廬綰列伝)
- 23 以後本稿では、韓王とされた韓大尉信を「韓王信」、後に楚王となる韓信は「韓信」と称する。
- 24 韓王信始、漢立之。(秦楚之際月表・漢二年十一月・韓)
- 25 属漢、為河南郡。(秦楚之際月表・漢二年十一月・河南)
- 26 松島隆真はこのことを項羽の封建制が当初から抱えていた主要な問題点の一つに挙げる。松島隆真「陳渉から劉邦へ—秦末楚漢の国際秩序—」26 頁。
- 27 (漢二年三月) 下河内、虜殷王、置河内郡。(高祖本紀)
王擊殷。(秦楚之際月表・漢二年三月・漢)
降漢印廄。(秦楚之際月表・漢二年三月・殷)
(殷・司馬印) 為河内郡、属漢。(秦楚之際月表・漢二年四月・殷)

- 28 居無何、漢王攻下殷。項王怒、將誅定殷者將吏。陳平懼誅、乃封其金与印、使使歸項王、而平身間行杖劍亡。……平遂至修武降漢、因魏無知求見漢王、漢王召入。(陳丞相世家)
- 29 (漢二年三月) 漢王從臨晉渡、魏王豹將兵從。(高祖本紀)
降漢。(秦楚之際月表・漢二年三月・西魏)
- 30 張耳敗走、念諸侯無可歸者、曰「漢王与我有旧故、而項羽又強、立我、我欲之楚」。甘公曰「漢王之入關、五星聚東井。東井者、秦分也。先至必霸。楚雖強、後必屬漢」。故耳走漢。漢王亦還定三秦、方圍章邯廢丘。張耳謁漢王、漢王厚遇之。(張耳陳余列伝)
(漢二年正月) 張耳來見、漢王厚遇之。(高祖本紀)
耳降漢。(秦楚之際月表・漢二年十月・常山)
- 31 歇復王趙。(秦楚之際月表・漢二年十月・代)
歇以陳余為代王、故成安君。(秦楚之際月表・漢二年十二月・常山)
陳余悉發三郡兵、与齊并力擊常山、大破之。張耳走歸漢。陳余迎故趙王歇於代、反之趙。趙王因立陳余為代王。(項羽本紀)
- 32 東擊楚、使使告趙、欲与俱。……陳余乃遣兵助漢。(張耳陳余列伝)
- 33 臧荼擊広、無終滅之。(秦楚之際月表・漢元年八月・遼東)
(遼東) 属燕。(秦楚之際月表・漢元年九月・遼東)
- 34 『史記』高祖本紀・留侯世家。
- 35 『漢書』ではこの時期の動向をさらに具体的に記す。
五月、漢王引兵從故道出襲雍。雍王邯迎擊漢陳倉、雍兵敗、還走。戰好時、又大敗、走廢丘。漢王遂定雍地。東如咸陽、引兵圍雍王廢丘、而遣諸將略地。……秋八月、……塞王欣、翟王翳皆降漢。(『漢書』高帝紀上)
- 36 楯身智志はこの時期の劉邦の動きについて、「戦国六国を復興しようとする意図」があり「韓・魏の復興を企図することで、両国の末裔たる韓王信・魏豹を味方にひきいれることに成功した」とする。楯身智志『漢代二十等爵制の研究』144頁。
- 37 例えば吉開将人は「楚漢戦争期から漢初にかけて、項羽の九郡からその南に位置する会稽郡(壮息)を経て、長江沿いに西に向かって臨江国(共敖)にまたがる広大な範囲が、楚漢戦争の末期において項羽の勢力域であった」とする。吉開将人「漢初の封建と長沙国」(『日本秦漢史学会会報』9、2008)154頁。
- 38 漢五年の諸侯王擁立時の記事として、「詔曰、故衡山王吳芮与子二人、兄子一人、從百粵之兵、以佐諸侯、誅暴秦、有大功、諸侯立以為王。項羽侵奪之地、謂之番君。其以長沙・豫章・象郡・桂林・南海立番君芮為長沙王」(『漢書』高帝紀下)とある。
- 39 漢五年の諸侯王擁立時の記事として、「徙衡山王吳芮為長沙王、都臨湘。番君之將梅鋗有功、從入武關、故德番君」(『史記』高祖本紀)とある。
- 40 辛德勇は吳芮の封地は楚漢のはざまである種の独立状態にあったとする。辛德勇「楚漢彭城之戰地理考述」(『歴史的空間与空間的歴史』)129頁。
- 41 漢二年、齊王田榮畔楚、項王往擊齊、徵兵九江。九江王布称病不往、遣將將数千人行。漢之敗楚彭城、

- 布又称病不佐楚。項王由此怨布、数使使者誦讓召布、布愈恐、不敢往。（黥布列伝）
- 42 ト憲群は、楚が分封した諸侯に対して項羽は徴兵・廢立与奪など一定の主権を持っていたとする（ト憲群「“覇天下”：楚的国家結構及其性質」『項羽研究（第一輯）』鳳凰出版社、2011、54頁）。しかし項羽が兵の供出を要求する例は黥布のみにほぼ限られており、王位の恣意的なすげ替えについても王を就国させなかった韓に対する特殊な例として行われているのみである。これらは周辺諸国の反攻に対する場当たりの動きの中に位置づけられるべき事象であって、項羽が持つ「主権」と理解するのは不適当だろう。
- 43 『史記』は、項羽が黥布を討たなかった理由の一つは黥布以外に頼るべき勢力を有さなかったためと解している。
- 項王方北憂齊・趙、西患漢、所与者独九江王、又多布材、欲親用之、以故未擊。（黥布列伝）
- 44 項羽本紀・高祖本紀・黥布列伝の関連記事は以下の通り。
- 漢之元年四月、諸侯罷戲下、各就国。項王出之、使人徙義帝、曰、古之帝者地方千里、必居上游。乃使使徙義帝長沙郴県。趣義帝行、其群臣稍稍背叛之。乃陰令衡山・臨江王擊之江中。（項羽本紀）
- 項羽出閩、使人徙義帝。曰、古之帝者地方千里、必居上游。乃使使徙義帝長沙郴県。趣義帝行、群臣稍倍叛之。乃陰令衡山王・臨江王擊之、殺義帝江南。（高祖本紀）
- 漢元年四月、諸侯皆罷戲下、各就国。項氏立懷王為義帝、徙都長沙、迺陰令九江王布等行擊之。其八月、布使將擊義帝、追殺之郴県。（黥布列伝）
- 45 例えば、奥崎裕司『項羽・劉邦時代の戦乱』（新人物往来社、1991）126頁、堀敏一『漢の劉邦』75頁。
- 46 項羽が「陰かに」義帝を撃つ命を下したとされることは、この紛争が本格的な戦争に至らず義帝の死によって収束し、また義帝は殺害されても義帝直属グループが殲滅されたわけではなかったこと、換言すれば義帝直属グループメンバーが以後も少なからず生き残ったことを意味するものと思われる。懷王政権の柱国だった陳嬰や同じく令尹だった呂清、司徒だった呂臣が後に漢に従っているのは（『史記』高祖功臣侯者年表）、義帝死後における配下集団の動きの一端を示すものだろう。
- 47 柴田昇「項羽政権の成立」93頁。
- 48 榑身智志は、「劉邦は楚漢抗争期に関東へ帰ることを強く望む諸將や兵卒の力を利用してきた」とする。榑身智志『漢代二十等爵制の研究』154頁。
- 49 陳蘇鎮は、六国中最も激烈な反秦戦争を行ったのが楚であったこと、楚以外の国々では民衆の反秦運動は比較的消極的だったことを指摘している。陳蘇鎮『漢代政治与《春秋》学』第一章第一節（中国廣播電視出版社、2001）、「天下苦秦”辨」（『兩漢魏晉南北朝史探幽』北京大学出版社、2013所収、2001初出）。なおこの問題については、柴田昇「陳勝論ノート」（105～107頁）・「秦末の抵抗運動」（210～212頁）でも若干言及した。